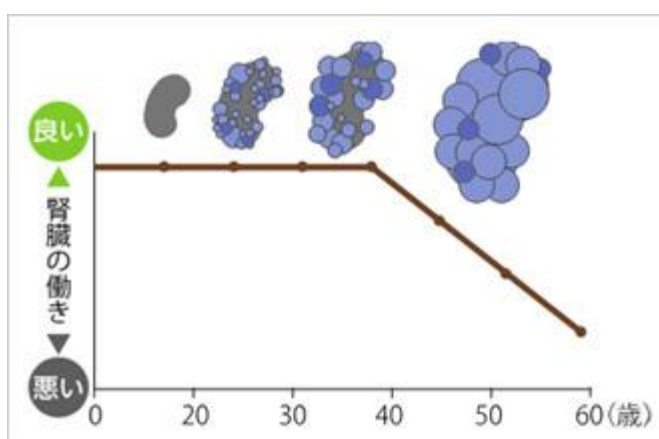


常染色体優性多発性嚢胞腎（ADPKD）とは

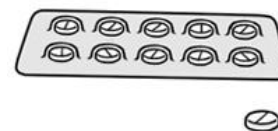


常染色体優性多発性嚢胞腎（ADPKD）は、遺伝子がかかわる病気で、主に腎臓に、嚢胞という水の入った袋が沢山できてしまう病気です。この嚢胞は、年齢とともに徐々に数が増え、大きさが大きくなると、腎臓の機能を悪くしてしまいます。30～40歳代までは、多くの方が無症状です。70歳までに約半数は末期腎不全になり、透析や腎移植などの腎代替療法が必要になります。嚢胞は感染や出血を起こし、疼痛（腹痛・腰痛）、血尿を伴う事があります。また、腎臓が大きくなると、腹部膨満感を感じ、食欲低下を来します。



トルバプタンによる治療について

2014年3月にバソプレシン受容体拮抗薬であるトルバプタン（商品名：サムスカ）という経口薬が保険認可され登録医により処方できるようになりました。この薬には嚢胞の増大を抑え、腎機能低下速度を遅らせる可能性が期待されています。また腎臓の働きが弱くなる前に治療を開始した方が、効果が高いと言われています。ただし、全ての多発性嚢胞腎の方に、トルバプタンが使えるわけではないので、腎臓専門医のいる医療機関にご相談ください。トルバプタンによる治療を始める際に数日間の入院が必要です。トルバプタンはどの医療機関でも処方できる訳ではなく、登録医のみ処方可能となっており、当院では複数の登録医が勤務し治療を行っております。



お薬の相談だけでなく、多発性嚢胞腎についてのご相談も受け付けております。